

入に始まり、1905年にフランスで「承諾」の概念を中心に、実験者と被験者の関係が契約化することがなされる一方で、アフリカの植民地で「先住民」に対して医学的実験が行われた年であったことを指している。

まず、18世紀の死体解剖が死刑囚の刑死体を使って行われ、これは、当時の死刑囚、君主、そして医者によって実行された。これは、一方では権威的序列関係があり、他方では供給される遺体を使って一方的になされた権利譲渡の関係であったと述べている。

解剖と刑罰とは、歴史的に結びつき、解剖用の死体は、もはや罪人のもの以外は使えないという状況が生まれ、解剖の需要が増大したイギリスでは、死体の裏取引が生まれ、墓地から死体を掘り起こして医者に売るという商売が誕生するに至り、今でも裕福な家庭の墓所が、金属の格子を張り巡らした檻の中にあることが見られるという。

さらに、著者のいう「君主的行為」として、毒見役として死刑囚を用いたり、新しい手術法を死刑囚で行ったりすることを、国王が医者に委任するようになり、死刑囚の体は高貴な人物の代替の役を果たすこととなった。これは、まさに生体実験といえるものであった。

さらに、種痘の導入は、実験の対象が国民全体となり、国民の大多数の保護と延命を図ることは国家の義務であるという側面を入手したことになる。臨床医学の誕生とともに、国家の補助を受ける者は、その代償として彼らの体を医学実験の材料として提供することになった。その中で、治療的試験の方法を巡り、数値的方法と比較対照の方法が用いられているが、前者は長期にわたる一連

の実験を必要とし、後者は一部の患者を無治療で放置する行為を含んでいることが倫理上の問題であるとしている。

また、19世紀後半になると、健康な人間を用いた予防接種の実験は、大きな倫理的危機を西洋社会に招き、フランス本土では、医学実験に対する規制が規範の形を取りつつあった。しかし、別の場所では植民地という「例外」的な土地に「例外」的な実験がなされるようになり、「卑しい体」は人種の特徴をもって再び現れることになった。

この本で、筆者は二重の批判を行っている。その一つは、現在のフランスでなされている科学者の仕事の実践的側面を捨象する科学史に対する批判であり、もう一つは、人口に膾炙した科学実験に対する道徳哲学からの批判である。これらを、300年前から現在に至るさまざまな流れを通して解明しようとした問題作であるといえよう。

文中には随所に図版が挿入されていて、①断頭刑死体のガルバーニ電気実験、②王の面前で死刑囚を対象に行われた腎結石切除術、③「残酷の四段階」（子供時代の動物に対する虐待、大人になって殺人者となり、死刑囚となり、生体解剖をされる）、④ワクチンで「牛化」した少年の肖像、⑤ペストの膿を自らに接種するエジプト遠征軍の軍医長、⑥ペスト患者に触れるポナバルト、⑦アレクシ・サン・マルタンの肖像（胃に瘻孔をもった男）、などが示されている。

（宮武 光吉）

[明石書店、〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5、TEL. 03 (5818) 1171、2018年9月、四六判、583頁、3,600円＋税]

吉元昭治 著

『図説 道教医学——東洋思想の淵源を学ぶ——』

著者の吉元氏には旧著『道教と不老長寿の医学』（平河出版社、1989年）がある。このたび新しく道教と医学を論ずる本書を著した動機については、冒頭の「はじめに」で述べられている。要

約すると、「道教医学」を長年研究してきた著者にとって、単に道教と医学を結びつけるだけでは真の理解にはならず、共通の根から眺める必要があることに気づいたとし、東洋医学の診療や学習

に従事する人々にむけて、中国医学と道教についての目先の理解だけでなく、それらの根底にある共通の思想を理解してもらいたいと願い、筆を新たに平易な文で書き上げたという。ここに述べられているように、本書は医学や道教思想の成立の淵源となった中国古代の自然観や陰陽五行説の歴史、諸子百家の思想等々、中国的なものの考え方の歴史について長い頁数を割いて解説している。著者は吉元病院を開設して医療にあたる医師であり、中国の思想や文化をこれから学ぶであろう後輩の東洋医学系医療従事者たちへの深い配慮が窺える。「はじめに」でも触れられているが、道教と中国医学の関係を直接考察した成果は中国などではいくらか存在する一方、日本では極めてわずかである。吉元氏の取り組みは貴重な意義を有する。

本書は大きく本文篇と図版篇の二篇から成る。「図説」と冠する書名の通り、図版篇には大量の図表を用いてあり、本文篇の記述をこれらと照らし合わせることで一目瞭然となるように列べられている。この図版篇にみえる図表の半数以上は道蔵内の道教典籍や古書等にみられる図版である。他方、図版篇冒頭の「図表1 中国歴史略表」をはじめ、著者自身が作成した図表も数多く載せられている。こちらには著者の道教や医学に対する理解等を図式化したものが多い。

著者は必ずしも学術機関に所属して専門の文献研究に従事してきたわけではないようであるが、中国医学はもとより道教に関する研究書や関係資料の収集量は相当なものであり、その熱意と博搜は十分敬服に値する。

ただ、中国の文献学の世界で道教を研究してきた評者からすると、やはり問題点も少なからず見えてくる。まず第一に、古典文献の扱い方に緊張感がいささか不足していることは否めないように思われる。『老子』、『列子』をはじめ、『太平経』や『黄庭経』等の道教系文献等について、現存のテキストがいつ頃どのようにして成立したか従来さまざまな研究上の議論があるのだが、本書ではその点にあまり細い配慮はなされず、伝統的に通行する理解にもとづいている場合が多い。上述の

ように本書は医学関係の方々に道教と医学との関係を平易に知らしめようと執筆されたものであり、学術書というよりは一般書の性格をもたせているようなので、必ずしも目くじらを立てる必要はないかもしれないが、たとえば引用文についての出所の明示、あるいは最新の研究成果の把握等々についても、もう少し意を用いてもらえればとの念が湧いてこなくもない。

また本書を繙く人は、道教と医学がそれぞれどのように交錯し影響しあったか歴史的な流れを理解できればと期待するのではないかと思うが、この点が案外見えにくい。図版篇の「図表90 道教医学と中国医学の流れ」、「図表91 中国医学、道教医学と道教」あたりはそこにかかわり、本書の最重要部分の一つとも捉えられようが、かなり入り組んだ図表の割には本文篇の該当部分の説明が大変簡略である。なぜこのような関係史が図示されるのか、図表に寄り添った詳密な文章による説明が是非欲しいところである。

そのほか、道教の中でも医学との関係が最も深い部分の一例と言ってよい内丹法についての記述があっさりとしていることもやや残念である。中華民国期の著名な中医、張錫純は「医学宜参看『丹経』論（医学ハ宜シク『丹経』ヲ参看スベキノ論）」（『医学衷中参西録』第五期第一巻）を著し、医学関係者も「丹経」すなわち内丹書を読むべきことを説いていたように、内丹法の知識は医学従事者にとって少なからず有益であろうと考えられる。もっとも、内丹法の研究の成果も必ずしも安心して依拠できるものが多いわけではないので、現状では致し方ない面があるかもしれない。

いずれにせよ、道教史にしても中国医学史にしても解明が容易ではない問題が山積しており、それぞれの明確化はまだ途上であるが、その中で両者の架橋を鋭意進める本書は貴重な価値を持つ。医療実践の傍らで、今後の日本の東洋医学界を思いつつ何十年も精力的に研究と執筆活動を続ける著者の姿勢には、何よりも畏敬の念を禁じ得ない。

(横手 裕)

[勉誠出版, 〒101-0052 東京都千代田区神田神保町 3-10-2, TEL. 03 (5215) 9021 (代表), 2018

年 10 月, A4 判, 485 頁, 50,000 円+税]

謝 心範 著

『養生の智慧と気思想——貝原益軒に至る未病の文化を読む——』

本書は、「順天の道」「節欲の術」を語る貝原益軒『養生訓』の読解を骨子として、人間が天寿を全うするために重要な養生論を分析し、それを踏まえて現代社会の文脈の中で「養生」の再解釈を試みる意欲作である。著者の謝心範氏（武蔵野学院大学教授）は、中国養生思想を論じた著作『真・養生学』でも知られる東洋医学史研究者であり、また実際の養生食品開発にも精通する実務家の面も持つ。近世の様々な「養生」論を議論の俎上にのせ、生活習慣病を含む現代の病に對峙しようとする本書は、2014年に提出された博士学位論文『『養生訓』の分析研究—漢籍の影響』を底本として加筆修正された一書であり、著者・謝氏のこれまでの養生論研究の集大成ともいえる著作である。

9つの章で構成される本書は、中国養生文化と日本養生文化の変遷を概観しつつ、以後の議論に不可欠な用語「養生」「未病」の定義を行う第1章にはじまる。第2章は、『養生訓』以前に日本で「養生」に言及した著作として、平安時代の宮中医官・丹波康頼が著わした日本最古の医学書『医心方』と、鎌倉時代の禅僧・栄西が喫茶の効能や製法を述べた『喫茶養生記』に焦点を当て、両書に通底する中国伝統医学からの影響や仏教文化の受容にうかがえるその史的的背景を紹介する。

以後の各章では、貝原益軒の『養生訓』へと眼差しが移る。第3章で謝氏は『養生訓』が引く各養生思想の典拠（主として中国古典養生文献）を示しつつ、益軒の学問における特徴、そして『養生訓』の文化的背景を論じる。この検討ののち、第4章～第8章では養生論理解の深化に不可欠な5つの要素、すなわち「思」「行」「食」「住」「衣」をもとに『養生訓』を読み解いていくことに意を

注ぐ。巻末には『養生訓』が扱っている全476にのぼる様々な養生論を前記の5要素に分類リスト化した資料を附している。ここに、『養生訓』を解説したこれまでの先行研究と一線を画す、本書卓見の術を窺うことができる。

ところで「思」「行」「食」「住」「衣」という5つの要素とは、具体的にどのようなものなのか。著者が展開する議論は以下の通りである。思考力や心の働きを示す「思」は人間身体に絶大な支配力、影響力を持っている。「思」の能力は外部との相互作用のもとで発揮され、学問や価値観、教養など芸術的な訓練といった内面的な修行によっても変化を受け、さらにその力は外部環境へも影響を及ぼす。「行」は、行動・行為・動作と静止を含む身体の日常的な動きを示し、「食」は口のみならず皮膚や鼻などを通じて体内に取り入れる全ての物質、およびその摂取方法が対象となる。さらに「住」は生活空間、自然環境のほか時間や季節も含み、「衣」は文字通り身に着けるものを示す。こうした5つの要素への言及の中で、著者は各要素を通じた人間の思考及び行動には、総じて自然への畏敬の念や慎みの心が必要不可欠であり、同時に「ほどほど」が重要であるとの論を展開する。また、単独で機能するのみならず相互的、重層的に関わり合いながら人体に働きかける「思」「行」「食」「住」「衣」を通じた「養生」の学びは、過去の産物ではなく、今日においても現代人がより健康的、快適な生活を営むことへも大きく寄与すると著者は主張する。如上の議論を受け、最終章の第9章では、現代に蔓延する生活習慣病と絡めて「養生」、そして病気に罹る前に治す概念、すなわち「未病」の必要性が説かれて本書は結ばれる。

本書では、「養生」と並び「気」の思想も議論